

の作品には共通している。『冬のソナタ』のヒットはそのようなストーリー展開をドラマに求める東アジアの人々の心理が反映されているともいえる。(本文執筆にあたっては李周遠さんの協力を得ました。)

Estuary English 近頃の若い者の英語

経営学部
安藤 聡

「河口英語」(Estuary English)とは英国の言語学者デイヴィッド・ロウズウォーンの造語であり、主にイングランド南東部の中産階級の若者が話す英語を指して言う。ロンドンからテムズ河口にかけての地域で最初に聞かれたことからこのように命名された。しかしながらロウズウォーンがこの新語を発表したのは1984年のことであり、初期河口英語世代は既に五十代に突入している。最近ではテムズ流域に限らずかなり広い範囲で若年層を中心に河口英語が話されるようになっていて、また中産階級ばかりでなく例えば上院議員の中にもこの種の英語を話す者がいる。「クイーンズ・イングリッシュ」を体現するはずのエリザベス女王の発音にさえ、河口英語の影響が認められるようになって来たという(御園 2004)。このような英語が発生した背景には、ロンドンから郊外へ移住する人口が増加し、ロンドン方言とケント州やサリー州あたりの RP (もともとこれらの地域には RP 話者が多かった) が混合したことがあ

る。

河口英語の特徴はおよそ以下の通りである。

(1) 語尾や音節尾の子音 'l' が 'w' の音になる：

例えば 'fall' は「フォール」というよりも「フォーウ」に近くなり、'milk' は「ミウク」と聞こえる。但し 'light' や 'lord' などの語頭の 'l' は普通に 'l' として発音される。これは標準英語 (Received Pronunciation. 以下 RP) における「曖昧エル」(dark 'l') がより曖昧化したために 'w' のように聞こえるということである。語頭の 'l' は「明瞭エル」(clear 'l') なので決して曖昧化しない。

(2) 語尾や音節尾の子音 't' が声門閉鎖音 (glottal stop) 化する：

声門閉鎖音になるということつまり、実際には音を発しないということであり、'it' は「イッ」、'out' は「アウッ」、'butter' は「バッター」と発音される。ロンドンの南にある空港 Gatwick は河口英語では「ガッウィック」、'フットボール' は「フッポーウ」になる。この傾向は特に若年層に顕著であり、このような発音は伝統や体制といったものに対する無意識の反逆とも考えられている (Coggale 1993)。'twenty' を「トウエニー」と発音するのは米語的な印象があるが、河口英語でもそう発音される。

(3) 語頭の 't' はより強く息を吐き出して発音される：

RP はアメリカ標準発音 (GA) と比べてもすべての 't' 音を強く発音する傾向があるが、河口英語では語中や語尾の 't' が発音されない一方で、語頭の 't' はいっそう強く発音される。そのため 'take' は「チェイク」、'tell' は「ツェウ」と聞こえる。

(4) 長母音 [i:] が二重母音のようになる：

例えば 'me' が「ミー」ではなく「メイ」に近くなり、また(3)の特徴と相まって 'tea' が「ツァイ」と発音される。

(5) 子音の後の 'y' 音が脱落する：

「ニュース」(正しくは「ニューズ」)の語頭の子音 'n' の後には 'y' の子音がある。発音記号ではこの音は [j] で表されるが、この [j] 音を脱落さ

せると「ニューズ」は「ヌーズ」になる。これは河口英語だけでなく米語にも見られる特徴だが、河口英語で特に顕著である。例えば 'student' は RP では「ステューデント」だが河口英語では「ストゥーデント」、マグロ (tuna) は RP なら「チューナー」、河口英語なら「トゥーナー」になる。日本語の「ツナ」はおそらくアメリカ合衆国からの外来語であろう。「ヌード」(nude) も同様であり、「正しい」英語では「ニユード」である。一方で 't' と 's' の後の [j] 音は RP でも脱落することが多く、'absolute', 'suitable' は RP, 河口英語双方において「アブソルート」、「スータブル」と発音される。これらを「アブソリュート」、「スュータブル」と発音すると非常に保守的な印象を聞く人に与える。また、「d」の後の [j] 音は脱落するのではなく 'd' の子音そのものに干渉し、'duty' や 'dual' はそれぞれ RP では「デューティー」、「デュアル」だが河口英語では「ジューティー」、「ジューアウ」に近くなる。但し 'Did you ~', 'Won't you ~' は本来なら「ディッヂュー」、「ウォウンチュー」だが、これらについては RP でも「ディッヂュー」、「ウォウンチュー」が許容される。

(6) 'st' が 'sht' に近い音になる：

先ほど 'student' は河口英語では「ストゥーデント」だと言ったが、この特徴を加味すれば「シュトゥーデント」と表記するべきだったかも知れない。河口英語ではこのように、「strike」が「シュトライク」、「instruction」が「インシュトラクシオン」と聞こえる。

(7) 特定の語彙に米語的発音が用いられる：

一例を挙げれば 'either', 'neither' は英語では「アイザー」、「ナイザー」だが、河口英語では米語と同様「イーザー」、「ニーザー」と発音される。

これらの発音上の特徴に加えて、河口英語にはその特有の言い回しがある。例えば 'Thank you' や 'Good-bye' の意味での 'Cheers', 'Hello' の代わりに 'Hi', あるいは人にものを渡すときの 'Here you are' が 'There you go' になる、といった特徴である。私が2002年夏と2003年夏に数週間ずつ滞在したオクスフォードの宿の小母さんは、

朝食を持って来るときにいつも 'There you go' と言っていた。オクスフォードはテムズ河口からかなり距離があるが、このように現在ではかなり広い範囲で、かなり広い年齢層が河口英語を話しているのである。レディング大学の複数の言語学者による研究では、ロンドンの北約80キロにある人工都市ミルトン・キーンズの1990年代初頭の若者の発音に既に、河口英語の特徴の多くが顕著に認められたという (Maidment 1994)。

多くの研究者が既に指摘しているように、河口英語の若者たちの間での急速な普及には、RP が象徴する伝統主義、保守主義への反逆という側面がある。上層中産階級以上の保守的な年輩者たちは河口英語という「近頃の若い者の英語」に眉をひそめ、伝統的な「美しい」英語が損なわれて行く現状を憂慮して一頃は新聞の投書欄を随分と賑わせた。年輩の RP 話者にとって河口英語は、米語と同じくらい「耳障りな」英語らしい。一方で地方の若者たちにとっては、河口英語は「都会的な」、「洗練された」英語に聞こえるため、それなりに魅力のあるものだという。また下層中産階級や労働者階級の若者たちにとっては、河口英語は自分の「家柄を隠す」ための「都合のよい」英語でもある。ロウズウォーンは1994年の論文で河口英語を「英語の均一化への初めての試み」と評価して、将来的に河口英語が「標準語」化する可能性を暗示している。しかしながら、辞書の発音記号通りの発音という意味では「模範的な」RP が河口英語に淘汰された場合、私たち日本人のように「外国語としての英語」を学ぶ者たちにとって、英国の英語はもはやその規範としての価値や魅力を失うかも知れない。

参考文献

- 木村和夫 'Some Aspects of Estuary English' 『文学論叢』第118号 (愛知大学文学会, 1999), pp. 190-202.
- 御園和夫 「英語の母音変化 エリザベス女王の30年」 『シルフェ』第43号 (シルフェ会, 2004), pp. 18-23.

Cogle, Paul, *Do You Speak Estuary?* (Bloomsbury, 1993).

Levey, David and Tony Harris, 'Accommodating Estuary English', *English Today* 71 (Cambridge University Press, 2002), pp. 17-20.

Maidment, J. A., 'Estuary English: Hybrid or Hype?', [Http://www.essex.ac.uk/speech/teaching-01/474/maidment.html](http://www.essex.ac.uk/speech/teaching-01/474/maidment.html)

Rosewarne, David, 'Estuary English: tomorrow's RP?', *English Today* 37 (Cambridge University Press, 1984), pp. 3-8.

-----, 'Pronouncing Estuary English', *English Today* 40 (Cambridge University Press, 1994), pp. 3-8.

(『文学論叢』と *English Today* のバックナンバーは大学の図書館にあります)



時代の奔流に抗して

法学部
竹中 克英

アメリカ大統領ブッシュの顔をたびたびテレビで見、その演説を聴く。すると、なぜかとたんに不快感に襲われる。かつて1960年代のアメリカ映画で先住民をまるで射的的のように撃ち殺していた開拓時代のならず者たちを思い出す。品性も教養も感じ取ることができないのだ、残念ながら。

わたしたち地球人は、確固たる安定した大地に不動の姿勢で立っている、と錯覚している。だが、事実はそのようなことはない。大地はすさまじい速度で回転しつつ、宇宙空間を巨大な楕円を描いて駆け巡っている。そして、わたしたちはまるでジェットコースターの乗客のようにこの「不動」の大地に乗り込んでいる。この構図を実感するには、地球外宇宙空間のどこかに視点をすえて、地球を観察すればいい。「それでも地球は動いている」とガリレオがつぶやいてから数世紀。わたしたちの踏みしめる足下の大地は決して不動ではないのだ。この物理的速度の脅威を実感できないのは、わたしたちが自分と同じように地球上の一切の物体が同じ速度で移動していることに起因する錯覚にとらわれているからにすぎない。

フランツ・カフカは「木々」と題する小品で次のように記している。

「なぜならぼくたちは雪のなかの木の幹のようなものだから。それは滑らかに雪の上に載っ